荒木光太郎文書 720

第三節　本土防衛に關する新構想

(一)大本營の作戰計畫大綱

大本營は一九四四年末以來新戰局に對處する方策を檢討しつゝあつたが一九四五年一月に入り第一節既述の如く日滿支の要域に亘る國防圏の確立を企圖し「最高戰爭指導會議」に於て「決戰非常措置要綱」を議定し戰力の維持、培養と策すると共に同節既述の米軍の企圖する戰略判斷に基いて一月二十日國軍が採るべき作戰に關し「帝國陸海軍作戰計畫大綱」を確定した。

其の基本思想は速かに國土及之が防衛に緊切なる大陸の要域に於て主敵米軍に對する不拔の態勢を確立しつゝ既成の戰力態勢特に千島、小笠原、南西各諸島及臺湾、上海附近要域の戰備を强化、確保し之を活用して航空縱深作戰を行し隨處に進攻米軍の洋上撃滅に努めゝ、已むを得ない場合に於ても地上守備軍を以て米軍の消耗と本土に向ふ其地の推進を阻止し本土を中核とする要域を確保せんとするものであつた。茲に於て第一節既述の如く捷號作戰計畫に於て重要決戰正面として選ばれた南西諸島、臺湾地域は本土を中核とする要塞防衛の縱深作戰據點たるの戰略目的に奬位せらるゝに至つた。

此の計畫の要點は次の通りである。

(二)大綱

(A)比島方面に於ては來攻中の米軍主力に壓强なる作戰を遂行してゐる。

米軍戰力の牽制に努める。

(B)米軍の本土に對する主攻就決と判斷せらるゝ東支那海周邊の作戰を重視し三月頃迄に準備を完成する、又硫黄島を含む小笠原諸島の防備を堅化し尙米軍が直接本土に來攻する場合をも顧慮し準備する。千島には米軍一部の來攻を予期し之に備へる

(C)進攻米軍に對する作戰要領は航空戰力を以て先づ洋上に撃滅するに努め而も上陸し來る米軍を補給遮斷と相俟て陸上部隊を以

荒木光太郎文書 720

て撃滅する。好機を捉へて來襲敵艦隊を攻撃し其の勢力漸減に努める。

(D) 支那大陸の作戦は米軍を主敵とする作戦に轉換し上海及び南支要域の作戦準備を重點とし國土を中核とする大陸國防要域の確保と東支那海に於ける航空作戦とを有利に遂行し米軍の本土に向ふ進攻を牽制すると共に米軍の大陸空海基地の獲得を封殺する。

(E) 防空は帝都の防空と本土の重要生産、交通港灣都市の防衛を重點とする、尚米空軍の基地を奇襲する。

(F) 本土作戦戦力造成のため南方資源の突破輸送を實施すると共に大陸と本土間海上交通の確保を實施する

(G) 奇襲特攻を戦法の主眼とする

(2) 國土要域の作戦指導の準據

(A) 國土に於ける作戦目的は米軍の進攻を破碎して國土特に本土を

確保するを主眼とする。

(B) 皇土防衛の爲の縱深作戦遂行上の前線を南千島、小笠原諸島、沖縄本島以南の南西諸島、臺灣及び上海附近とし之を確保す。此の前線地帯に於て已むを得ず米軍の上陸を見る場合に於ても極力米軍の消耗を圖り基地の設定を妨害する。

(C) 本土、南鮮及上海附近に對する米軍の上陸に際しては陸海空戦力を發揮して之を撃滅する、又千島、小笠原、南西各諸島及臺灣に於ては予め所要戦力を増加して作戦準備を整えると共に機を失せず所要航空戦力を集中増加して之を撃破する。

(D) 國土特に本土及朝鮮の作戦準備は万難を排し速急且本格的に強化し米軍の熾烈なる空襲を予期し之に即應する戦場態勢を整へつゝ概ね本年秋迄に概成する

米軍の上陸企圖に對應する作戦準備は先づ速かに關東地方、九州及南鮮方面を概成する

荒木光太郎文書 720

(二)四十箇師團動員を骨幹とする本土兵備策定の腹案

前項の新作戰構想に基いて本土作戰兵力として新設を要する部隊は一般師團四十箇師團、獨立混成旅團二十二箇及び之に附隨する軍直部隊である。海軍に於ては先づ南西諸島方面の作戰に最大の努力を拂うことゝし差當り陸戰準備と海上特攻部隊の增設等の外本土防衛の爲新兵備を計畫しなかつた。

既述の樣な日本の人的、物的戰力をおかして斯の樣な膨大な兵備を短期間に完遂する事は極めて困難なる事情に在つたが次の諸項に準據し徹底して絶對要求を充たさんことを期した。

(1)航空戰力、防空戰力の擴充强化を絶對優先とする

(2)特攻兵器の整備を重視し其の進捗に伴つて、屈敵兵備を强化する

(3)戰力不徹定な部隊を建設することを戒め、戰力充實した精鋭武力と裝備極端に低分な大衆武力の建設に徹底する

(4)滿洲、支那の兵備的獨立を强化する

(5)本土の兵備を充足する爲滿洲、支那方面を犧牲にし同方面から所要の人員特に幹部を本土に轉用する

(6)海軍の一部産施設の一部を陸戰兵器製造に轉用し在滿作戰用集積資材を陸軍に轉用する

(三)本土兵備の運用の腹案

以上の兵備方策に基いて本土兵備の充實運用を次の樣に腹案した。

(1)軍管區と方面軍との設置

內地の軍司令部を作戰軍司令部と軍管區司令部とに分離し作戰軍司令官(方面軍司令官)をして作戰準備に專念させて行政と緊密な關聯を持つ軍事行政に關しては軍管區司令官を之に當らしめることゝして作戰時に於ては作戰軍の係累を除き其の行動を神速輕快にし且軍を中核とする軍民一体の國內戰備態勢を確立する目的に出たものである

(2)國內警備組織の整備

荒木光太郎文書 720

軍管區司令部設置に伴つて國内警備態勢を整理し作戰軍が作戰準備及決戰に總力を集注する事が出來ると共に官民の總力を結集して之に協力出來る樣警備組織を次の如く定めることゝした。

軍管區司令官 → 師管區司令官 →
- 補充隊（各府縣、支廳に置き隊長（司令官以下が之を兼ねる））
- 警備司令官 →
  - 警備隊
  - 特攻警備隊
- 聯隊區司令官
- 地上防衛隊長 → 防衛隊
- 警備司令官（名古屋、横濱、京都、大阪、神戸に置く）

(3) 作戰部隊の兵備

(A) 方面軍司令部の設置

內地作戰準備急速强化の爲第十一方面軍（仙臺）第十二方面軍（東京）第十三方面軍（名古屋）第十五方面軍（大阪）第十六方面軍（福岡）米軍と予想上陸地點に獨立混成旅團四箇を編成して作戰準備促進のための應急措置とする

(B) 沿岸配備師團の動員（第一次兵備）

本土沿岸要域を守備し上陸し來る米軍を沿岸に拘束し決戰兵團の機動作戰の支撐となるべき沿岸配備師團十八箇を動員し築城等の作戰準備を急速に促進する。

(C) 決戰師團の動員（第二次兵備）

決戰師團として精鋭機動師團八箇（陸軍の人的現在能力を以て出來得る最精鋭なるもの）獨立戰車旅團六箇、同聯隊五箇を動員する外に滿洲方面から精鋭師團四箇を本土に轉用する、又總軍司令部二箇、軍司令部九箇を動員し本土統帥組織を整備する

(D) 第三次兵備

沿岸配備及機動戰力を充實する爲本年九月頃を目途に更に次の兵備を實施する。

一 航空師團十六箇（沿岸配備師團　九箇
機動師團　七箇）

混成旅團　十五箇

混成聯隊　五箇

其の他砲兵部隊を主体とする直轄部隊

(4) 兵站部隊の兵備

(A) 兵備の概要

兵站部隊は主に滿洲方面から轉用する新に動員する兵站部隊は純作戰兵站部隊に限定し其の他は總て國民の力に依存することゝした。

即ち動員するものは獨立自動車大（中）隊、〃 立輜重兵大（中）隊、各種勤務隊を主体とするもの人員四十万、自動車一万二千輛、馬匹四十七万頭、輜重車二万輛で自動車は民有車に依存し馬匹は運輸馬の一/7を徵發し輜重車輛は中央整備の二万輛の外は各軍が現地調弗することゝした。

(B) 施設の概要

國家の保有資源を擧げて速急に本土決戰々力を造成して要域に集中し作戰準備を完遂す、之が爲

(イ) 國土を速急に戰場態勢に移して兵站準備を六月梅成、十月完成する

(ロ) 特に關東及び九州、四國地方は本年中期迄に完整する。

(ハ) 戰場生産態勢を確立する、特に軍管區等の自給態勢を重視すると共に爆撃被害減少の爲徹底せる分散と掩護を行ふ

大年中期頃迄に國（本）土に戰力を集中す、之が爲一九四五年前半期に於ける戰力整備を最大限に實施する外、大陸より出來る限り多くの戰力を抽出して本土に轉用する。其の轉用

荒木光太郎文書 720

計畫は次表の通り

在滿資材轉用計畫

轉用方面	資材	數量	轉用時期					摘要
			十月	十一月	十二月	一月	二月	
內地	燃料（千）							
	航空揮發油	一七	一三	五				差當り左記比率に揚陸 新潟 四 敦賀 二 福岡 四
	普通揮發油	二〇	八	七	三			
	潤滑油（千）	一〇		一〇				
地上彈藥		一〇ケ師團會戰分						
南鮮	航空揮發油（千）	三						平壤地區に輸送
地上彈藥		三ケ師團會戰分			三			

(ロ) 航空關係兵站

飛行機保全施設の強化、特攻用暴彈の整備情報通信網の整備、燃料の地域別分散確保を重視し六月末迄に完成する。

荒木光太郎文書 720

第四節　一九四五年初頭の大本營命令と指揮組織

(一)大本營命令

大本營は(二)項に記述した作戰思想と兵備策定の方面に基いて陸軍側に於ては一月二十二日に從來の軍司令部を廢して作戰軍たる方面軍司令部と軍事行政を主任務とする軍管區司令部とを設置し夫々任務を與へた。此の命令は二月初め大本營に防衛總司令官、各方面軍司令官を招集して傳達すると共に參謀總長は參集各軍司令官に對して爾後各方面軍は從來の內地留守業務乃至消極的警備、防衛的性格を一擲して急迫せる祖國の運命を決定する本土決戰軍たるの新思想に轉換し之に即應する如く作戰訓練の徹底、作戰準備の急速完成、情報勤務の刷新、幕僚勤務の向上、交通々信の確保と資材の愛護、万物の戰力化を强く要望する所があつた。

聯合艦隊は日本々土より作戰の實施するに至つたが海軍側に於ても戰局が本土に近迫するに伴ひ鎮守府、警備府の長官が聯合艦隊司令

長官の指揮下にない爲聯合艦隊の作戰遂行上の支障があつた。茲に於て一九四五年一月、支那方面艦隊、海上護衛司令部々隊、鎮守府警備府部隊は捷號作戰に關しては聯合艦隊司令長官の指揮を受ける如く發令された。

「帝國陸海軍作戰計畫大綱」次で三月二十日附を以て之に基く海軍、當面の作戰計畫要綱を發令すると共に本土方面所在各艦隊、各鎮守府警備府參謀長を大本營に招致し具体的事項に關し指示を與へ戰備の促進に努むる所があつた。

(イ)陸軍が防衛總司令官及第十七方面軍司令官に與へた命令の要旨

防衛總司令官及第十七方面軍司令官に與へた任務は次の諸項に準據して本土若は朝鮮と其の周邊に侵寇して來る米軍を擊滅して本土及び朝鮮を確保すべき要旨のものであつた。此の任務達成の爲防衛總司令官に示された準據

(A)本土に於ける作戰準備の重點は關東地方、九州地方及東海地方

荒木光太郎文書 720

とし此の各地域と阪神地方の防空を重視すること。

(B) 米空軍の來襲に當つては之を迎撃する外海軍と協同して本土周邊に來攻する米機動艦隊の撃破に努めること

(C) 米軍の侵寇に方つてわ極力之を洋上に撃滅すること

(D) 陸上交通及港灣の防衛を重視し又特に本土、朝鮮間の海上交通保護に遺憾なからしむること

(E) 海上交通保護に關し爲し得る限り海軍に協力すること

(2) 第十七方面軍司令官に示された準據

(A) 蘇國に對する防衛作戰準備に關しては所要の事項に關し關東軍總司令官の區處を受けること。

(B) 朝鮮に於ける作戰準備の重點は南鮮方面（濟州島を含む）の要域とすること。

(C) 朝鮮、從實鐵道及北鮮鐵道、豆滿江上の要點の防衛に遺憾なからしむる事

(3) 三月二十日附下令した海軍作戰計畫の要旨

此の計畫の基本思想は近く豫期する沖縄作戰が地理的にも時機的にも米軍に反撃を加へる最有效の戰機と認め此の作戰に海軍の總力を結集發揮して米軍の國土侵寇企圖を未然に撃碎するを主眼とし此の間本土の防衛態勢を強化して戰勢の變轉に即應する靭强なる作戰遂行の準備を實施せんとするものであつた。其の指導の大綱は次の通りである。

(A) 當面作戰の重點を東支那海周邊特に南西諸島正面に指向し特に航空兵力の徹底的集中を圖り來攻する米軍主力を撃滅す

(B) 此の間極力國土防衛態勢を強化し米軍が直路本土要域に來攻する際は機を失せず機動兵力特に航空及特攻兵力を集中して之を反撃々滅する。

本土防衛は關東及南九州方面を重點とすると共に主要海峡、灣口の防備强化を圖り海上交通を確保す。

荒木光太郎文書 720

(C)戰局の推移を注視し所要に應じ益々本土防衛に徹する作戰準備を強化推進し國家總力の戰力展開を計り之を重點に統合して來攻する本土陸軍を撃滅する

(D)東支那海方面の作戰に於ては先づ航空兵力の大擧特攻々撃を以て米機動部隊に痛撃を加へ次で米軍船團を洋上及水際に捕捉し各種兵力の集中攻撃を以て其の大部を撃破するに努める、尙上陸せる米軍に對しては執拗なる地上作戰を以て飽く迄米軍の航空基地獲得を阻止し我が航空作戰目的を達成する。

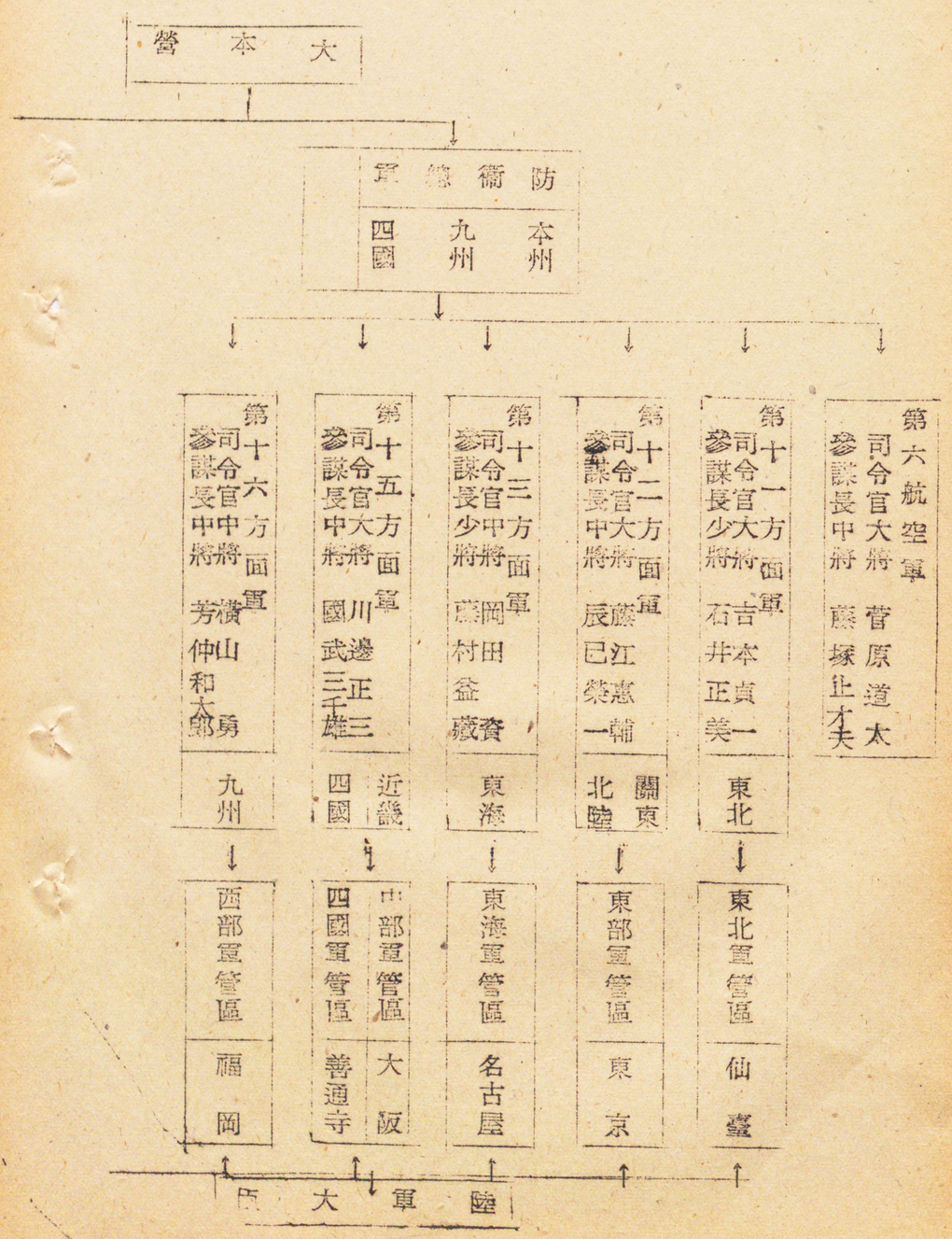
(E)本土作戰に於ては各種特攻々撃を以てする米軍船團の洋上及水際撃破を重視する

(二)指揮組織

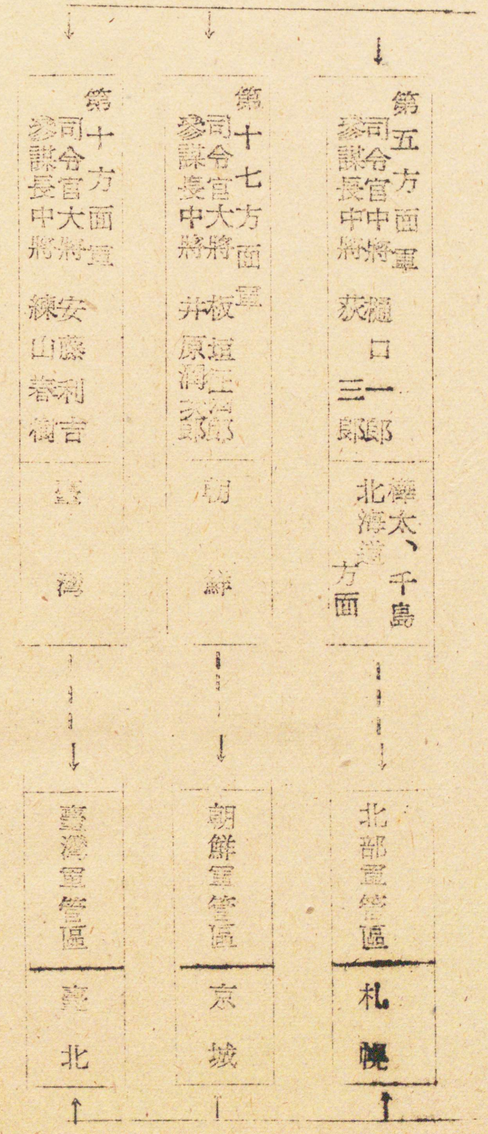
前項命令に基く本土及關係要域防衛の指揮組織は次表の通りである

(1)陸軍部隊の指揮組織

陸軍部隊ノ指揮組織



荒木光太郎文書 720



備考

一、→指揮　---→限定任務ノ指揮

二、方面軍司令官ハ作戰、防衛ニ關シ軍管區司令官ヲ指揮ス

三、作戰準備ト一般行政ノ連繫ヲ密ナラシムル爲方面軍司令部ト軍管區司令部ハ司令官以下幕僚兼勤ス

四、防衛總司令官ハ航空作戰及海上交通保護ニ關シ第十七方面軍司令官ヲ指揮ス

三九

(ハ)海軍部隊の指揮組織

荒木光太郎文書 720

本土方面に於ける日本海軍指揮組織

大本營

聯合艦隊（本土、支那）
司令長官大將 豊田副武
參謀長中將 草鹿龍之介

（捷號作戰ニ關シ作戰指揮）

支那方面艦隊（支那方面）
司令長官大將 近藤信竹
參謀長中將 左近允尚正

海上護衛總司令部
司令長官大將 野村直邦
參謀長中將 西尾秀彦

横須賀鎮守府（東北、關東、東海）
司令長官中將 塚原二四三
參謀長少將 横井忠雄

大湊警備府（東北以北）

第三航空艦隊（鈴鹿以東）
司令長官中將 寺岡謹平
參謀長大佐 山澄忠三郎

第五航空艦隊（鈴鹿以西）
司令長官中將 宇垣纏
參謀長少將 横井俊之

第十航空艦隊（本州、四國、九州）
司令長官中將 前田稔
參謀長少將 山本親雄

第二艦隊（內海）
司令長官中將 伊藤整一
參謀長少將 森下信衛

第六艦隊（內海）
司令長官中將 三船茂義
參謀長少將 佐々木半九

第十二航空艦隊（東北以北）
司令長官中將 宇垣完爾
參謀長少將 鹿目善輔

第二遣支艦隊（香港、廈門）
司令長官中將 副島大助
參謀長少將 大熊護

海南警備府（海南島）
司令長官中將 伍賀啓次郎
參謀長少將 千田金二

第一護衛艦隊
司令長官中將 岸福次
參謀長少將 杉浦矩郎

荒木光太郎文書 720

大本營

- 支那方面艦隊（支那方面）
  - 司令長官大將 近藤信竹
  - 參謀長中將 左近允尚正
- 海上護衛總司令部
  - 司令長官大將 野村直邦
  - 參謀長中將 西尾秀彥
- 横須賀鎮守府（東北、關東、東海）
  - 司令長官中將 塚原二四三
  - 參謀長少將 横井忠雄
- 大湊警備府（東北以北）
  - 司令長官中將 宇垣完爾
  - 參謀長少將 鹿目善輔
- 呉鎮守府（中國、西國）
  - 司令長官大將 澤本頼雄
  - 參謀長少將 橋本象造
- 大阪警備府（關西）
  - 司令長官中將 岡
  - 參謀長少將 杉崎新彰
- 舞鶴鎮守府（日本海方面）
  - 司令長官中將 田結穆
  - 參謀長少將 鳥越新一
- 佐世保鎮守府（九州）
  - 司令長官中將 杉山六藏
  - 參謀長少將 石井敬之
- 鎮海警備府（朝鮮）
  - 司令長官中將 岡敬純
  - 參謀長少將 石塚千俊
- 高雄警備府（臺灣）
  - 司令長官中將 福田良三
  - 參謀長少將 黑瀬洗
- 第一護衛艦隊
  - 司令長官中將 岸福次
  - 參謀長少將 杉浦矩郎
- 海南警備府（海南島）
  - 司令長官中將 伍賀啓次郎
  - 參謀長少將 千田金二

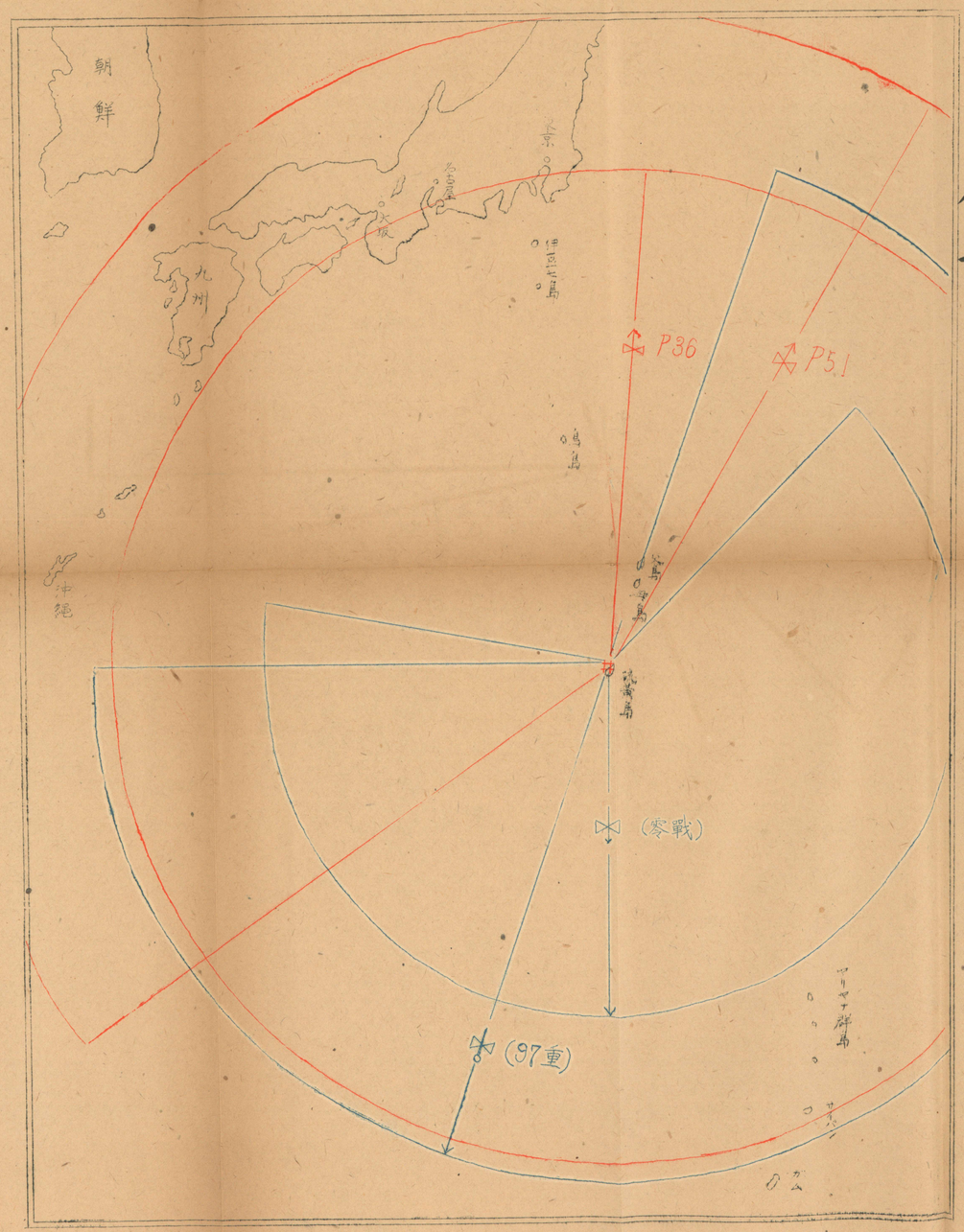
參謀長少將 大熊護

荒木光太郎文書 720

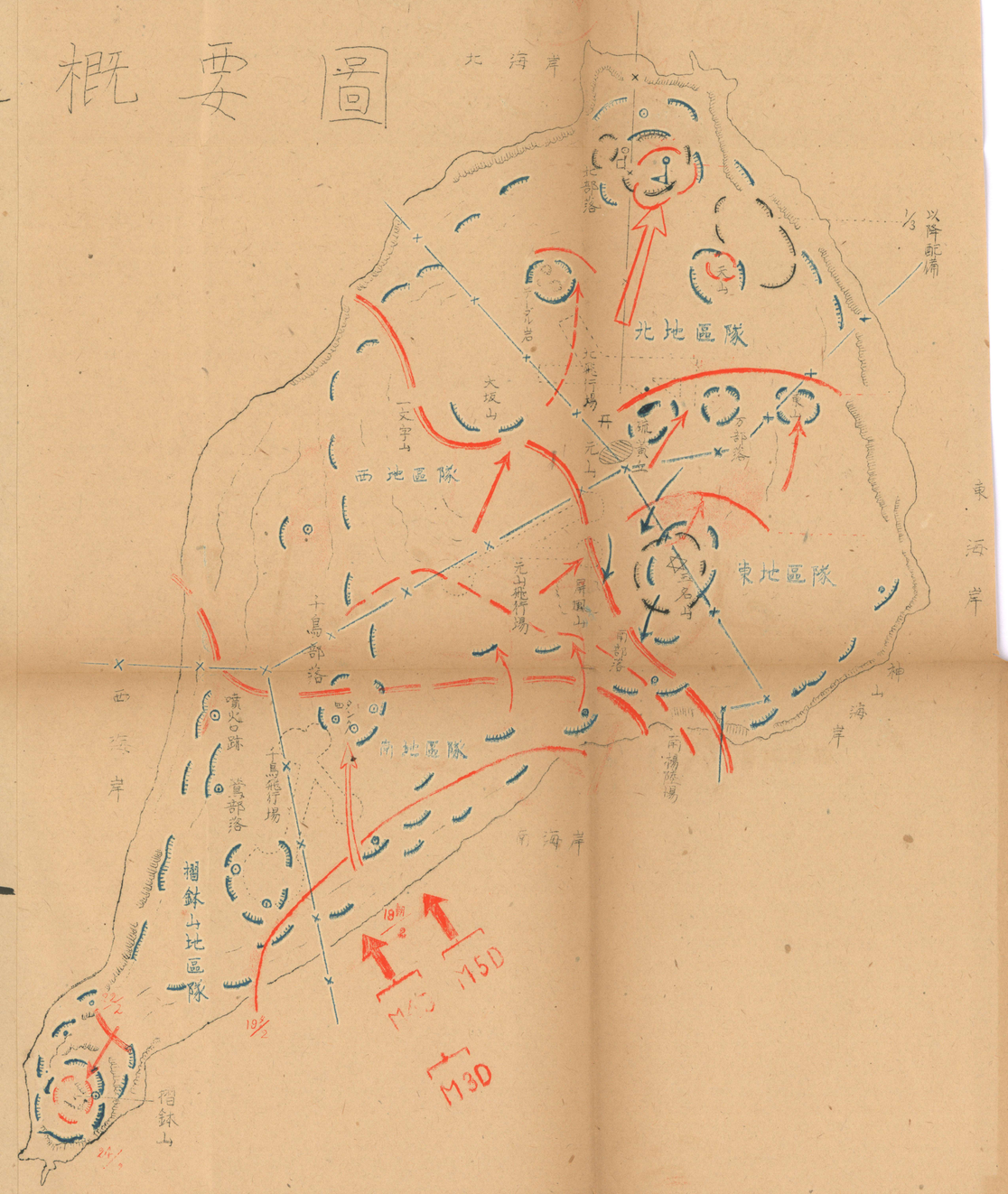
以上の措置に依つて本土防衛の決戦準備は漸く眞面目なる努力を集中する姿勢となつた。

第三節　硫黄島の防禦（眞面目参照）

硫黄島作戰經過概要圖



硫黄島ヲ中心トスル戰略要圖



荒木光太郎文書 720

(一) 戰略的地位と米軍の動向

小笠原群島の中核をなす此の島は東西約八粁南北約四粁の**特殊三角形**の小島であるが中部及南部に飛行場適地を持ち北は小笠原群島を經て東京灣口の諸要塞に連り南は「マリヤナ」群島に中繼する。東京及び「サイパン」より夫々概ね一二〇〇粁の距離に位置し本土防衛上特に重要なる航空戰略要點を成して居る。尚此の島の特徴は地熱が高く到る處硫黄瓦斯を噴出し水に乏しく大部隊の宿營と地下築城とに不便である。又島の東北部は懸崖が多く上陸に適する正面は三角形等邊の南邊 $\frac{2}{3}$ のみである。

此の島は開戰以來中部太平洋基地に向ふ中繼航空基地となり又部隊及び艦船に對する哨戒監視、邀撃の爲重要なる使命を帶び戰力が本土に接近するに伴ひ其の戰略的地位は益々重要さを增して來た。此島を米軍に奪取せられたならば優勢なる米空海軍に對し本土の心臟部が露呈する、「マリヤナ」基地の米戰略爆撃機群は此の島を基

地とする米基地戰闘機群の直接援護を受けつゝ本土を攻撃することが出來る。從つて此の島は米軍の次の攻撃目標として狙はれる必至の運命に在つたのである。此の島に對する米空軍の攻撃は「サイパン」作戰開始の頃から頻繁となつて來た。第一回の攻撃は六月十五日延一二〇機米艦載機の攻撃を以て開始された。一九四四年七月四日には三五〇機に及んだ、記録される米軍攻撃は一九四五年一月末に至る迄米機動部隊の攻撃は十二回延一二六九機、基地航空隊の攻撃は六十九回延一四七九機、水上艦艇の攻撃は八回、延六十四隻に達した。一九四五年初頭には其の動向が一層活潑となつて來た。此の攻撃により硫黄島に對する補給と戰力增强が困難となり戰備の促進を著しく阻害された。一月下旬頃には「マリヤナ」「ウルシー」方面に於ける米軍船團の動きが高潮し二月五日には中部太平洋方面に於ける米軍飛行機の呼出符號が全部變更され其の通信狀況は此の方面に對する新企圖を示唆するものがあつた。

荒木光太郎文書 720

(二)二月初旬頃の硫黄島の防備

一九四四年七月「サイパン」失陥後大本營は此の島を本土防衛線の一環として確保し米軍が進攻し來れば戰力特に航空戰力を集中して米軍を我が基地航空圏内に邀撃々滅する方針を定め防備を急いだ。

即ち大本營は從來第三十一軍司令官の隷下に在つた小笠原群島防備の兵團を大本營の直轄とし九月二十二日父島要塞歩砲兵部隊を基幹として第百九師團を編合し師團長栗林中將に對し所在海軍部隊を併せ指揮し小笠原諸島の防衛特に航空根據地の確保し米軍の來攻に當つては之を撃碎して群島を死守し米軍の飛行場利用を成可く長く制拒すべき任務を與へた、又七月十日第三航空艦隊を新設して陸軍の第一航空軍と共に此の方面の航空作戰を擔任せしむることゝし新に第三航空艦隊司令長官の指揮に入れた第二十七航空隊の司令部を硫黄島に進出せしめた。一九四五年二月米軍が「ルソン」島に上陸し其の前途楽觀を許さないものがあり硫黄島に對する米軍の來攻早期

必至を豫想せらるゝに至つたので既定方針の遂行に關し二月上旬大本營に於て硫黄島防衛の陸海合同の作戰研究を行つた然るに當時比島方面の作戰に於て海空戰力の精鋭を失ひ而も近く豫期せられる臺灣及び南西諸島方面に對する米軍の進攻に備へ空軍の再建に懸命の努力を要する現況と我が航空基地配備の關係上有效なる航空作戰の遂行が困難なる實情に在つた而も增援兵力の輸送を期待し難い、同島の地上兵力の現狀を以てしては早晩米軍の積極的作戰に手に委ねさるを得ない事情を確認せざるを得なかつた爲從來の方針を一擲して專ら栗林兵團の敢闘に依り本土防衛準備のための會戰間隔を獲得するに止め航空兵力と潜水艦の一部とを以て好機に乗じ攻撃することゝした。

當時に於ける小笠原兵團の配備は三力を以て硫黄島を防備し各一部を父島と母島に配備した。

尚硫黄島守備隊の作戰に關し後退配備と水際直接配備との兩案が陸海軍間に論議せられつつあつたが既述の如く一月作戰方針が變更せ

荒木光太郎文書 720

られ持久作戰に徹する事となつた爲栗林中將は海軍の希望し來つた水際決戰方式を中止し縱深に施設せる坑道陣地を利用し持久消耗戰、法を採用することゝした。

又硫黄島の築城は一九四四年以來元山を中核とする坑道二八〇〇米に及ぶ陣地の構築を計畫し一酸化炭素と硫黄を含有する熱氣に對し防毒面を著用して工事に努め概ね五〇%程度概成した。但し坑道の概成は五〇〇〇米のみで未だ摺鉢山と元山との坑道連接は完成し得なかつた。

硫黄島守備隊の編組、戰力は次の通りであつた。

(1) 編組

守備隊長　第百九師團長
陸軍中將　栗林忠道

第百九師團師令部
混成第二旅團

歩兵第百四十五聯隊
獨立混成第十七聯隊第三大隊
戰車第二十六聯隊
獨立機關砲第一第二大隊
第二十、第二十一、第四十四機關砲隊
獨立速射砲第八第十二大隊
獨立迫擊砲第一中隊
中迫擊砲第二第三大隊
獨立臼砲第二十大隊
其の他海軍部隊、五千名

(2) 戰力

(A) 人員　二万三千名
　　内陸軍部隊　一万七千五百名

(B) 兵器

荒木光太郎文書 720

名稱	數量	彈藥	名稱	數量	彈藥
火砲(七五粍以上)	一二〇	一〇万發	噴射砲	七〇	各砲五〇發
對空火器(三五粍以上)	三〇〇	各砲五〇〇發	對戰車砲(四七粍)	四〇	〃五〇〇發
小銃其の他の小火器	二〇〇〇〇	二、二〇〇万發	〃(三七粍)	二〇	〃五〇〇發
追擊砲(八粍と十粍)	一三〇	各砲九〇發	戰車	二三	
臼砲	二〇	四〇發			

(c)糧秣

二ケ月半分

(三)硫黄島防禦戰闘の經過

(1)米軍の上陸

一九四五年二月十三日海軍偵察機は米軍艦船一七〇隻よりなる大船團が「サイパン」島西方八〇浬沖を北々西に航進しつゝあるのを發見し各方面に此の報を打電した。小笠原兵團は戰備を下令した。十六日米軍は延一、〇〇〇機の艦載機を以て關東地方を襲撃し一方早朝より硫黄島に對し熾烈なる艦砲射撃を開始した。

十八日には水際陣地及び飛行場破壞のため、大規模の艦砲射撃を加へ十九日〇八〇〇より艦砲射撃及爆撃の掩護を受けつゝ上陸を開始した、一一〇〇頃には上陸兵力は一万、戰車二〇〇以上に達した。米海兵第四、第五師團と推定せられた。此の日の砲爆撃に依り海岸の我が「コンクリート」製、火點の大部は破壞せられ、火砲陣地は半減した。二十日には早くも千鳥飛行場を失ひ南北地區を分斷せられた。

二十一日には更に米軍は大型輸送船三〇隻の後續新兵團の揚陸を開始した。

荒木光太郎文書 720

二十二日夕刻米軍第一線は南波止場、元山飛行場北側、千鳥部落の線に達し其の進出深度は二粁に及び橋頭堡を構成した。此の日の砲撃は三万發に及んだ。

陸軍航空部隊（第六航空軍）は一部を以て艦船及び上陸地點の攻撃を敢行し數隻を撃沈したが兵力僅少なるため大勢を左右する戰果を求め得なかつた、第三航空艦隊の一部も同樣一部を以て米艦艇に對する攻撃を敢行し米航空母艦一隻を撃沈した。二十三日には元山第二飛行場をも奪取せられた。

(2) 主陣地帶に於ける激戰

二月二十三日から三月三日に亘り中央地區主陣地帶一帶に於て日米兩軍の寸土を爭ふ必死の攻防戰闘が反覆せられた。二十六日頃には米軍の爲主陣地帶を蠶食せられて田原坂、城山等の陣地を失ひ元山砲臺屏風山に於て必死の爭奪が反覆せられた。

是れより先此島の東南端に在る最重要據點、摺鉢山を死守してゐた

厚地大佐の指揮する守備隊は十九日の艦砲射撃に依り全火砲三三を破壞せられ大多數は戰死し摺鉢山の山容は一變する狀況であつた。二十一日迄此の砲撃は繼續せられ飛行機と戰車の猛撃を受け二十三日に至る迄此の高地を繞る戰闘が續いたが遂に大部は全滅した。孤島を取圍む米艦隊の砲撃と早くも陸地基地を併用する米航空部隊の協力を受くる米地上部隊の優勢なる砲兵、戰車とを以つて不斷に反覆せられつゝ耕地的破壞は我が陣地を覆し死物狂ひに敢闘する我が勇敢なる將兵の血肉をさらつた。我が將兵は此の絶望的なる苦闘にも斷じて屈することなく上下一丸となつて敢然として孤島死守の任務に奮闘した。次の數字は激戰の模樣を髣髴し得るであらう。

二十六日迄の彼我の損害推量

我が損害	
兵員	第一線部隊平均五〇％

荒木光太郎文書 720

重火器　大半破壊
火砲　六〇％

米軍に與へたる損害
兵員　一万三千
戰車破壞　二一〇
若は擱座
飛行機撃墜　六〇
艦船　撃沈　B又はC二、C四、T九、LST三、
炎上　LST等三一、

二月二十七日守備隊は玉名山、東山地區、北部亭、漂流木附近の獨立據點に陣地を攻補して持久戰を行ふ方針をとつた。米軍は海兵第三、第四師團を第一線に出し海兵第五師團を第二線に控置して力攻を續け是等の據點は孤立の形勢となつた。

三月二日、三日の激戰に依り我が火砲、戰車の一部は破壞せられ指揮官は六五％死傷し兵員は三五〇〇に減耗して最早、組織戰鬪の遂行が困難になつた。

(9) 最後の戰鬪

栗林中將は三月五日殘存兵力の主力を北地區の複廓陣地に集め最後の戰鬪を準備した。

十三日米軍の一部は此の複廓陣地に侵入した。我が部隊は〇九〇〇軍旗を奉燒した。

兵團長栗林中將以下守備隊將兵は此の無援の絶海猫額の孤島に於て全島を掩ふ米軍の砲爆撃と戰車各種火器の熾烈なる攻撃に對抗し、一ヶ月に亘り連日敢鬪した。兵團長は忠君愛國の至誠に徹し部下に對する慈愛と勇氣と沈毅に優れた武將であつた。

守備隊將兵は慈父の如く敬仰した。兵團長は此の苦しい激戰の間にも沈毅、冷靜に作戰を指導し而も日々貴重なる戰訓を大本營に

荒木光太郎文書 720

打電するとゝを努め戦闘の苦難、増援の希望等に一言も觸れなかつた。米軍に與へた損害は三万三千、戦車二七〇臺と推定された。斯くて今は殘るべき最後の複廓陣地も形骸なき迄に破壊せられ親愛せる部下の大部は斃れ火砲は破壊し盡くされた。

任務を貫行した兵團長は三月十七日辭世の歌と訣別の辭を大本營に打電し同夜殘存將兵と共に一丸となつて出撃し最後の力闘と光榮ある戦死を求めた。其の奮戦の狀況は二十二日迄報ぜられた。

遂に硫黄島の防禦戦闘は終焉した。爾後小笠原群島守備の指揮は父島守備隊長立花中將が採ることゝなつた。

三月二十二日に於ては此の島の飛行場に米軍大型及小型飛行機數十機が使用を開始した。

斯くて米軍の次の攻撃の矢が臺灣若は沖縄方面の何れかに指向せらるる事が確定的に予期せらるる段階に入つた。